

高校中途退学の予防に関する考察

A Consideration on the Prevention of High School Dropout.

高 賢 一
Kenichi TAKA

〈要旨〉

さまざまな理由で高校を中退する生徒は少なくないが、その原因としてよくあげられているのは、「学業不振」、「進路変更」、「問題行動」などである。しかし、これは教師の目から見た中退の原因であり、中退予防の支援策を講ずるためには、学業不振や進路変更などの心理的背景を解明する必要がある。教師や学校に対して強気であったり、批判的であったりする中退者は少なくないが、その裏側には、「話を聞いてほしい」、「自分のことを聞いてほしい」という弱気な部分も兼ね備えている。過去に筆者が教育相談担当教員として関わった48件の高校中退事例の中で、中退予防の有効な支援策に結びつくと思われる5事例を取り出し、「A：高校生活に対する不満によるもの」、「B：不本意入学や学業不振等によるもの」、「C：対生徒や対教師などの対人関係によるもの」、「D：その他によるもの」の4つのパターンに分けて検討・考察している。

〈キーワード〉

学業不振, 問題行動, 進路変更, 中退者の葛藤心理

1 はじめに

文部科学省は、平成4年12月11日に「学校不適応対策調査研究協力者会議報告(概要)」を発表している。ここでは、高校中退の現状や原因、基本的認識、中退問題への対応などを明らかにしている。対応の基本的視点として、「高校教育の多様化、柔軟化、個性化を進めていくこと、中退の背景となる生徒の学校不適応の状況を的確に把握し、積極的進路変更を理由とする中退への指導の在り方を含め、個々に応じた指導が必要であること、学校において魅力ある教育活動を展開し、学校への適応を図っていく指導が重要であること」を指摘している。高校中退問題に対する文部科学省の積極的な姿勢が窺える。

筆者は、長らく公立高等学校(複数校)において教育相談業務に携わってきたが、当然のことながら数多くの中退者に関わるようになった。さまざまな理由で高校を中退していくが、その原因としてよくあげられるのは、「学業不振」「進路変更」「問題行動」などである。これは、あくまでも教師の目から見た中退の原因である。中退予防の支援策を講ずるためには、学業不振や進路変更などの心理的背景を解明する必要がある。過去23年間にわたって公立中学校や公立高校の教員として勤務したが、教育相談活動の一環として取り扱った48件の中退事例の中、中退予防に結びつくと思われる5事例を取り出し検討・考察する。

2 事例の概要と経過

高校を中退した生徒が学校を去った後に面接や電話連絡などを実施することは容易ではないため、在学中に深く関わった事例をふり返りながら分析することにした。抽出した事例をおおむね4つのパターン、つまり「A：高校生活に対する不満」「B：不本意入学などの個人的理由」「C：他の生徒や教師などとの人間関係」「D：その他」に分け、中退予防に結びつくと思われる代表的事例を検討することにした。(個人の特定を避けるための脚色あり)

Aタイプ：もっと学校に温かく見守ってほしかったAさん

1. 退学に至る経過

高2のAさん(男子)の1年次は、部活動(テニス部)においても交友関係においても、あらゆる面で充実していた。しかし、2年生になってからは、親しい友達が次々と退学してしまったために、学校がつまらなくなってしまう。当時の学校は、身なりの面でかなり厳しい生徒指導を行っていたが、こうした厳しい指導に反発した生徒たちが学校を去っていった。生徒を叱る時はきちんと叱ることについて異議はないが、温かみを感じない冷たい叱り方はAさんの反発心を煽ったようである。担任や教育相談係としては、閉鎖的な考え方を改めて前向きに考えてほしいと説

得したが、どうしても学校の雰囲気に馴染めないということで、両親ともよく話し合った結果、退学届を出すに至った。

2. 退学直後の心境とその後

退学届を提出した時のAさんには、本当に清々しい雰囲気が漂っていたが、その後のことは何も考えていない様子であった。そのことを担任は心配して情報を提供したが、今後のことについては、じっくりと時間をかけて考えたいとのことだった。結局、父親の知人の誘いで鉄工所で働くことになったようである。その後、学校が夏休み中に、Aさんは担任と私を訪ねてきて、次のようなことを語ってくれた。「あの時は学校を辞めて清々したが、時間が経つにつれて学校を辞めたことを後悔するようになった。確かに、あの時の生徒指導担当教員の態度や言動に限界がきて辞めてしまったが、こうして世間に出て働いてみると、もっともっと厳しいことがたくさんあるということがわかり、もう少し自分に素直になればよかった」と後悔している。

3. どのような支援が必要だったか？

高校は義務教育ではないし、社会人になって気づくことがたくさんあるので、どうしても高校に馴染めない者は、無理をして高校を続ける必要はないという考え方もあろう。しかし、Aさんの場合は、学校を続けたいとか卒業したいとかいう思いは全くなかったわけではない。親友が次々と学校に反発して辞めていく様子を見ているうちに、学校に対する反発心がますます助長されていったものと思われる。Aさんは、次から次と問題行動を起こしてお払い箱になったというわけではなかったが、もう少し冷静に自分を見つめさせるように指導できたら、あるいはもっとAさんと話し合う時間を確保できたら退学には至らなかったのではないかと悔やまれてならない。学校の教員は、学校という権威のバールに守られているが、生徒はそうではない。だからこそ、生徒を守る必要があると思われる。

Bタイプ：第1志望でない高校に入学したが、こだわりを捨て切れず中退したBさん

1. 退学に至る経過

高1のBさん（女子）が入学した高校は、第1志望ではなく第2志望であったことから、入学直後から学校に馴染めなかった。ただ、自宅から近くて、地元では評価の高い進学校であった。第1志望校の場合、自宅から遠くてアパートを借りるか親戚宅に下宿させてもらうかの選択が必要であった。中学校の成績では、第1志望校への合格可能性は五分五分という不安定な状況だったので、第2志望校を

受験することになったわけである。しかし、第1志望校はBさんにとっては大きな夢であり、それ以外の高校は考えられなかった。せっかく第2志望校に入学したものの、気持ちはそこにあらずという状況が続いていた。

高校1年1学期までは、気が抜けた状態でありながら何とか登校できたが、夏休みに入った途端に、「もうこの学校へは行けない、もう一度第1志望校を受験させてほしい」と親に相談をもちかけた。親としては、「そんなに無理をする必要はないのではないか？今の学校でも努力してそれなりの成績を残せば、それこそ自分が行きたい大学へも進学できるはずだから、第1志望校ではなくても大丈夫だよ」と元気づけた。しかし、彼女にとって第1志望校以外にいても気力が出てこないということで、やむなく退学し、第1志望校受験をめざして塾に通うようになった。

2. 中退直後の心境とその後

教育相談係としては、担任の依頼により夏休み中に彼女と何回か面談することができたが、Bさんの意思は相当強いものであった。夏休みが明ける頃に中退を決意したのであるが、退学届を提出した後、相談室を訪ねてきた。自分にとってこの学校は本当に居心地が悪く、退学届を出したことについては何の後悔もしていないこと、第1志望校をめざして死にものぐるいで勉強したいことなどを話して帰っていった。翌年の4月には、みごとに第1志望高校に入学したものの、なかなか勉強についていくことができず、5月の連休明けぐらいから登校できなくなり、ついには自宅に引きこもってしまった。

3. どのような支援が必要だったか？

高校の場合、第1志望ではない学校に入学する、いわゆる不本意入学の生徒が少なくない。自分に力がなかった、努力が足りなかったなどと諦める生徒もいるが、プライドのせいか、どうしても諦めきれない生徒もいる。本人や保護者が第1志望校に対する熱い思いがあるのならば仕方がないが、ただ何となく居心地が悪い程度のものであれば、最初に入學した高校に適應できるような支援が必要かもしれない。高校によっても異なるが、このようなケースはいくつかみられるので、成功したケースや失敗したケースなどを提示し、長い目で冷静に考えさせることも必要であろう。

また、再受験に対するモチベーションがどれくらいものなのか、面談などを通して見極める必要がある。たとえば、単に学校のネームバリューにこだわるものなのか、第1志望の高校で勉強したいという熱い思いがあるのかないのか、本人の再受験動機・意向などを確かめたうえで、それを踏まえた支援を施す必要があると思われる。

Cタイプ(1): 担任との折り合いが悪く、やむなく中退したCさん

1. 退学に至る経過

Cさん(男子)は、高校1年次の担任と相性が良かったのか、遅刻や忘れ物などの問題はあったものの、大したトラブルもなく2年に進級した。わりと大らかな1年次の担任とは異なり、真面目で几帳面な2年次の担任は、何か問題があるとすぐに保護者に連絡していた。遅刻が多いとか、忘れ物が多いとか、素直ではないとか、掃除をしないなど、何か問題があるたびに保護者に電話をかける傾向があった。保護者は、最初は謝罪する一方であったが、余りにも頻繁に自宅に電話をかけてくるので、本人はもちろんのこと、保護者までが呆れて不信感を持つようになってしまったのである。そうした不信感は、しだいに怒りへと転化していった。

ある時、担任の注意を振り切って教室に入ろうとしたが、担任が追いかけてきてトラブルが発生した。担任は、教師に対する暴力であると騒いだため、生徒指導室に呼ばれて長時間にわたって説諭を受ける形になった。担任とは話したくなかったので無視したことを正直に話したが、逆に説教される形になってしまったのである。どうしても担任に素直に謝罪する気持ちになれなかったため、無期停学となってしまった。担任や学年主任は、たびたび家庭訪問をしたが、保護者や本人は、これまでの担任の対応に限界がきていることを伝えた。しかし担任は、Cさんの態度が悪いことを指摘するばかりで、話し合いは平行線となった。ついに、学年主任と担任は、教師に対して素直でないばかりではなく、周りの生徒にも恐怖感を与えているので、会議を開いて処分内容を決定するから、決定されるまでそのまま自宅で待機するようCさんに指示した。

ついにCさんは、自分に問題があったことは受け入れながらも、これまで自分なりに我慢をしてきたこと、担任の無神経な言動に素直になれなかったことなどの不満を露わにした。それを聞いた担任は、Cさんがもっと素直に担任の指導に従っていればこんな悪循環は起こらなかったと主張し、Cさんを責めても自分の非を認めようとはしなかった。Cさんの怒りは最高潮に達し、「おまえなんかの顔を見るくらいだったら、学校なんかやめてやる!」と啖呵を切った。予想もしない展開に、担任も学年主任も面食らった様子で、考え直すよう説得にあたった。保護者は、確かにCさんが素直に指導を受け入れなかったことを認めつつも、担任の対応に限界を感じていたため、本人の気持ちを尊重したいと伝えた。担任と学年主任は、もう一度じっくり考え直してほしいという言葉を残して家庭訪問を終えた。しばらく冷却期間を置いて、再度Cさんの真意を確か

めたところ、学校を続ける意志はないということで、6月に退学届を提出する結果となってしまった。

2. 退学直後の心境とその後

自分に問題があることを認めつつも、沸き出る怒りの感情を押さえ切れず、とうとう最悪のシナリオになってしまった。Cさんには、学校を続けたいという気持ちはあったにもかかわらず、余りにも口うるさい担任にうんざりし、学校を去ることになったことについては後悔していないようであった。Cさんは、その年の10月に通信制の高校に転入学し、仕事をしながら通信制の高校を卒業して、立派な社会人として活躍している。

3. どのような支援が必要だったか?

学年主任は、担任とCさんの関係があまり良くないことに気づいていたが、どちらかという学年主任も担任とよく似たタイプだったので、担任の指導方法についてはあまり違和感がなかったようである。たまたまCさんが、相談室にやってきて担任の不満やグチをこぼしていたので、教育相談係として担任と話し合う機会を持った。担任のもどかしい気持ちはよくわかるが、あまりこと細かに自宅に電話を入れたりすると、素直になるどころか逆効果になるのではないかと、もっと本人といろいろなことについて話をしてみてもどうかと提案した。学校で問題が起きていることについては教員が対処すべきことはわかっているが、それでもうまくいかない場合は保護者に伝えて、保護者にも協力してもらう必要があると力説した。

しかし、学年主任も学年団の教員も、Cさんのような生徒に対しては厳しく指導すべきだし、保護者にも協力してもらう必要があるということで意見が一致したようである。厳しく指導することに異議を唱えるわけではないが、もう少し対処方法を工夫すべきではなかったのか、つまり、保護者への連絡はもう少し控える、Cさんとじっくり話し合う時間を持つ、1年次の担任からCさんの指導方法について示唆を得る、保護者との信頼関係を構築するなどである。

Cタイプ(2): 生徒や教師に偏見を持たれ、理不尽な噂を立てられ退学したDさん

1. 退学に至る経過

Dさん(男子)の場合、型にはめるだけの指導方法が嫌になり、高校2年9月に自らの意志で退学した。退学した理由は、他の生徒や教師に対する不信感と憤りである。高校2年6月、Dさんの校内喫煙が見つかり謹慎となったが、教室に復帰した後、ノートをとらない、居眠りが多いなど

の理由で、担任や生徒指導課の指導を受けた。その後、こうした問題はなくなったが、昼食時間に誰かが部室で喫煙しているという噂が広まり、またDさんが喫煙しているのではないかという話が担任に伝わってきた。さっそく担任はDさんを個別に呼び出し、真偽を確かめようとしたが、Dさんは強く反発した。

私の方からは、決定的な証拠がないまま推測で本人を疑うのは好ましいことではないと思われるので、もう少し事実関係を明らかにする必要があるのではないかと提案した。加えて、Dさんは一番信用していた担任から疑われたことに強いショックを受けていたことを伝えた。担任自身も、私の話を聞いてショックを受けていたが、再度Dさんと面談した結果、誤解がとけたようである。しかし、生徒指導課にもDさんの話が伝わり、生徒指導課から確認の面談を受けた。生徒指導課は、部室の中に誰がいたかを調べたところ、数人の部員の中にDさんがいたことが明らかになった。数人で喫煙していたことは事実のようであるが、一人一人に聞いてみると自分は喫煙していないと主張したため、結果的にはそこにいた部員全員が謹慎指導の対象となってしまった。

2. 退学直後の心境とその後

Dさんは2回目の指導を受けることになり、本人もさることながら両親もかなり落ち込んでしまった。Dさんは、自分のことを信じてもらえなかった不甲斐なさや不信感で退学を決意することになる。疑われるような場所にいたことは事実であり、そのような場所に入るべきではなかったと反省している。誰が喫煙していたかが明らかにならない以上、全員が謹慎指導の対象になることについては仕方がないと諦めたにもかかわらず、自分は絶対に喫煙はしていないという確固たる信念を持っていた。

Dさんにとっては、極めて理不尽な指導を受ける形となり、これ以上醜態をさらしたくないということで退学を決意する。担任も私も慰留するよう説得したが、Dさん自身はもちろんのこと、両親も本人の気持ちを受け入れ退学するに至った。本人もさることながら、両親も学校や他の生徒に対する不信感が強く残り、禍根を残す形で学校を去ることが懸念された。退学後のDさんは、定時制高校への転入学が決まり、そこで再スタートを切った。そして、定時制高校を無事卒業し、大都市圏で営業マンとして活躍していることを母親から聞いた。

3. どのような支援が必要だったか？

このケースは、禍根を残す形で学校を去っていく悲劇的な結末を迎えた。謹慎の指導歴があるために、Dさんにとって、周りの生徒から色眼鏡でみられたことは辛いことで

あったと思われる。もう少し教育的配慮や指導方法の工夫が必要だったのかもしれない。このケースの場合、1回目の謹慎指導の詰めが甘かったのではないか、部室での喫煙については嚴重注意という形をとり、今後このようなことがあればそこに居合わせた生徒全員を謹慎指導の対象にすることを警告する形の指導方法が良かったのではないかなど、いくつかの課題を残したようにも思われる。今後、このような事例が発生した場合、より慎重かつ効果的な指導・支援の工夫をはかる必要があると思われた。

Dタイプ：クラスの小集団に入ることができず、孤立して中退したEさん

1. 退学に至る経過

高1のE(女子)さんは、どちらかという自分の方から積極的に集団の中に入っていくタイプではなく、誰かに声をかけられて遠慮しながら入っていくタイプであった。Eさんのクラスでは、一人で昼食をとる女子は何人かいたが、彼女たちはマイペースで、一人で昼食をとることに對して何の抵抗もない様子であった。周りの女子は、Eさんのことを一人で食事をとる女子生徒の一人と見ていたもので、意識してEさんに声をかけることはなかった。4月の終わりごろに突然登校しなくなったので、驚いて家庭訪問を実施したところ、グループの中に入られないことで落ち込んでいることが初めてわかった。

その後、私と担任と一緒に家庭訪問をして本人と面談した結果、幻聴などの症状がみられたので、両親と本人の了解を得て心療内科を受診してもらうことになった。その結果、対人不安傾向が強く不安神経症と診断され、服薬とカウンセリングによって自宅で療養することになった。約1か月間治療に専念してもらい快復するに至ったが、今後Eさん自身が学校を続ける自信がないということで、5月下旬に退学届を提出するに至った。

2. 退学直後の心境とその後

神経症の治療は効果があり快復に向かったが、どうしても学校を続ける自信がなく、止むなく退学することになった。その時のEさんは、何だか肩の荷がおりたような感じで穏やかな表情を見せた。Eさんの中学校時代は、小・中連携ができていたことから、友人関係などには特に大きなトラブルもなく、充実した生活を送っていたようである。私の勤務校では、5月の連休明けあたりから新入生の出身中学校へ出向いて情報交換を行っていたが、そこに至る前にEさんの不登校が始まったわけである。中学校側も、Eさんについてはそんなに心配していなかったもので、驚いた様子であった。Eさんは、その後通信制の高校に進学し、

元気な学校生活を送っているとのことだった。

3. どのような支援が必要だったか

もう少し早い段階に中学校を訪問できれば良かったと後悔したが、それは結果論なのかもしれない。4月当初にクラスの人間関係づくり、例えば構成的グループエンカウンターなどをホームルーム活動に取り入れるとか、担任が工夫したプロフィール表を生徒に作成させ、それを面談に役立てるなどの工夫が必要だったのかもしれない。Eさんのような目立たない生徒については、担任はよく見落としがちである。授業に出ている教科担任から情報を収集するなどの工夫があれば、もっと早く気づいたのかもしれない。

3 事例から学ぶ高校生の中退予防に関する考察

1. 中退者は、学校や教師に反発しながらも期待感を抱いていることに配慮する

生徒は、うるさく注意されることに本当に拒否的なのだろうか。「自分達の話真剣に聴いてほしい」「自分達と向き合ってほしい」、このような悲痛な叫び声が聞こえてくるようである。教師の熱心さが生徒に伝わっていない、あるいは響いていないこともある。型にはまらない自分にも悪いところがあると内省している面もみられるので、生徒は決して教師や学校を一方的に批判しているわけではない。規則・管理を緩めるのではなく、教師が生徒に心理的に歩み寄り、生徒もそれに応えて心を開いていく、そんな関わり方が強く求められているのではないか。教師がどれだけ生徒に歩み寄ることができるか、それが大きな鍵を握っているのではないか。

2. 中退者にみられる強気と弱気の葛藤心理を理解する

教師は、何とか生徒の特徴をつかみ、望ましい方向に持って行こうと強気の部分である管理的指導が先に立ってしまうことから、生徒の強気の部分と衝突してしまうことが

少なくない。教師と生徒の強気の部分がお互いに衝突するがゆえに、教師の真意が生徒に伝わらず、教師と生徒の気持ち合いが噛み合わない現象が起こってくるといえよう。こうした事例から学ぶことは、教師と生徒の関わり方を問い直し、教師が生徒を指導するのではなく、支援するという関係を軸とした学校システムを構築していく必要があるのではなかろうか。生徒を総合的に理解するためには、生徒の弱気の部分に耳を傾ける姿勢も求められよう。

3. 多様な価値観をもつ生徒のニーズに配慮し、生徒の自立を支援する

学校の雰囲気合わないなどの理由で、学校を去っていく生徒も少なくない。何となく学校の雰囲気に馴染めず、積極的な対人関係が形成できず、周りの生徒や教師もそのことに気づかないなどの偶然が重なり、しだいに孤立感を深めて退学に至るものである。このような生徒に対して、学校として何ができるのかを考えると、なかなか難しい課題ではあるが、担任として、部活動への積極的な参加を促したり、ホームルーム活動の中に仲間づくりのための活動を取り入れたり、作文や面談を通して本人の性格特徴や悩みなどを把握するような工夫を重ねていく必要があろう。

4. 精神疾患や発達障害等を抱えた生徒の対応に努力する

その他として、不安神経症や強迫性障害、あるいは抑うつ・統合失調症などの精神疾患、自閉症や学習障害などの発達障害を抱えた生徒の対応も重要である。発達障害を抱えた生徒の場合、不登校やいじめの対象になるなどの二次的な障害が発生することが懸念される。精神疾患の場合、養護教諭・学校医・医療専門機関等との連携が重要な課題となってくる。生徒の中には、心療内科・精神科あるいは医療専門機関などに通院・服薬しながら通学している者もいる。精神疾患や発達障害、病気等が原因で退学に結びつくケースも少なくないので、このような問題の対応もできるような学校の態勢が求められている。

【参考引用文献】

1. 文部科学省編『学校不適応対策調査研究協力者会議報告（概要）』（1992年12月）
2. 「高等学校中途退学予防のための提案」（東京六法出版、2005年）

